
赤羊は夜空に歌う

any熊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤羊は夜空に歌う

【Nコード】

N3392C

【作者名】

any熊

【あらすじ】

普通にいたらだと学生生活を過ごしている少年は割と問題を抱えていた。彼は様々な問題を隠すため周囲に色々と振りまわされる。これはそんな彼を中心とした物語。のハズ。

第一話、かみんぐないとうおーかー

バイトも終わり、酒気の籠った満員電車で揺られて最寄駅に着く頃にはもうその日は終わって次の日になっている。立ちっぱなしのバイトと満員電車で身体は疲れに疲れてとにかく眠い。このまま路肩で眠ってしまいそうだ。まあ、冬の寒さが薄れてきたとは言え、寝たら凍死は免れないだろうが。熱いコーヒーでも飲めば目が醒めるかもしれないけれどもそんな事はあまりしたくない。コーヒーのブラックを飲める奴はきつと味覚がおかしいに違いない。少し寒くなったのでコートの襟を少し立てた。路肩の電灯はやたらと間隔が広く配置されていて薄仄暗いが、目が慣れれば民家から漏れ出る明かりもありある程度ならなんとなく歩ける。ある程度というのは一つだけ重要な問題があるからで………個人的な事だけれども俺はこう言った不気味なのがあまり好きじゃない。いや、都会民で科学っ子だけれども、いや、だからこそ、そう言った伝承のたぐいにひたすら弱い。小学生の頃だって当時流行った「口裂け女」を本気で信じ、登校拒否になりかけた。いや、というか実際休んだわけだけれども……。成長した今でもやはりそういった未知なる物が怖い。幽霊だって怖い。死んだ人間が生き返ってうらみのある人にとりつき殺したり、そんなの関係なく何か不気味な事するのを見るのも怖い。大体死んだ人間が生き返ったらどうなるのだろう。死んだままの姿で出てくるのだろうか？ 刃物で胸を刺されたり、鈍器で顔を壊されたりした状態で俺の前に現れるのだろうか？ だとしたら怖すぎる。死んだ人間は生き返らないからそんなの怖がるなというけれども、そんなの昼にお茶の間でせんべい食っている人たちが言っているだけなのだ。闇の中、独りになった時に同じような台詞を言っている。『山には不法投棄された遺体があるかもしれない』という可能性を胸に夜の山を独りで歩いて欲しい。脚の動きが段々と機械的になっていく。心臓の動きを自分で自覚できる。今、振り向いて

何かいたらどうしよう、っていう感じだ。で、そう言った俺にとつて今現在大問題な事がある。

背後から何かを引きずるような音がずっと聞こえているのだ。

……安アパートまであと二百メートルほど。走っても良いと思う。問題は逃げきれるかだ。もしコイツが家の中にまで入りこんでくるような奴だったら俺は一体どうすればいいのだろう。というか、落ちつけ俺。まだ、幽霊の類と決まったわけではない。もしかしたら風で何かが動いているだけかもしれない。風は吹いていないけれども。偶然たまたま何かが鞆に引っ掛かってしまったのかもしれない。ずりずり音を立てるような手応えはないけれども。酔っ払いかもしれない。足音はないけれども。……冷静に考えれば考えるほど焦りに飲みこまれそうだ。振りかえるか。いや、それは怖い。けれども、どうしよう。だめだ。一番怖いのは自宅にこられる事だ。ベッドでいざ寝ようと思うと中に何かいる。耳を澄ますと、籠もった子供の泣き声が聞こえる。おそろおそろ近付くと、まだ泣き声がする。勇気を出して布団を捲るとそこには歪んだ少年の笑顔があつて、歯が黄色くて眼が赤くつて、肌が異様に白くつて……、とにかくとにかく晒う。闇の中、少年が不意に口を大きく空けるとそこにはいくつもの目眼晒目口晒眼眼口晒目口目眼目口目眼晒目眼口口……やばい、凄い怖い。振りかえるのは怖いけど、でも、それを俺は出来るのか。ただ困ったことに、だんだんと振り返りたくなっている。嫌がる理性に反目して、ココロが後に向きたがっている。駄目だ、見るな。ただ、首は勝手に後ろに回り回り廻り……

そこには闇の中何かを呟きながら地面を這う少女がいた。

恐怖に突き動かされ俺は叫んだ。近所迷惑なんか関係ない。怖い。なんだこれ。駄目だ。なんで？　ここは住宅街だぞ？　こんなもの

んだよ。声を止められそうに無い。理性なんか無視。叫ぶ中、一つ気付いた。驚いたことに俺が上げた悲鳴に反応して少女も悲鳴を上げたのだ。悲鳴が重なり合い段々消えていく。……あれ？

思いきり悲鳴を上げた照れ隠しに咳を一つ払う。

「……えつと……君つて、何？」

少女ははつとしたように俺の事を見上げる。

「えつと、私は、その……」

口ごもった少女を見る。暗くて顔や表情は良く分からないけれども眼は多分二つだし、口も裂けていない、あと、俺よりも若そうだ。ちゃんと手足も在るし欠損部位はない。髪は黒のミドルでレイヤーカットだ。着ている服は黒を基調としたシックなワンピース。胸元には三日月を象った銀のネックレスがある。多分、ナイフやカッターなどの凶器も所持していない。そこまで確認して、一息つく。

「えつと、名前を言いたくないのなら別に良いです。あの、何処か具合が悪いんですか？」

俺の言葉に少女は顔を伏せる。

「きにしないでください。少し眠いだけだから……それよりも……」

……それよりも、なんなのだろう。というか、眠いだけで立ちあがれないって状況の方に俺は驚くばかりだけれども。

「貴方の家にながらせて欲しいんですけど」

「……なんで？」

「動けないから」

「119は？」

「お願いします」

携帯を取り出してボタンを三つ押そうとする。

「そうじゃなくて」

止められた。

「なんで？ お金ないですよ？ だからこんな遅くまでバイトやってるという事実があるのですけれども」

「お金目的じゃありません」

「……………長島茂夫のプロ野球カードは渡さないけれど?」

「なんですかそれ」

男の浪漫です。同年代のほとんど誰も知らなかったけど。

「それよりも、家出?」

「違います。親から送り出されました。貴方の元に行くように」

「どんな親なのだろう。」

「なんで?」

「貴方がお母さんを助けたから」

今まで娘さんがいそうな女性を助けた事はなかったと思う。とい
うか、そんな事、がらではないと思う。確実な人違いだ。

「どのように? ていうか人違いじゃないでしょうか?」

少女は俺の言葉に首を横に振る。

「貴方なのは間違いないです。だって、匂いをちゃんと憶えてきた
から」

「匂い?」

「貴方の匂い」

「人間がそんな簡単に感覚記憶できる訳ないと思うけれど」

そんな俺の言葉に少女はなんでも無いように応えた。

「だって、私、人間じゃないですから」

は?

いや、足あるじゃん。俺の凝視に気付いて、少女ははつとした。

「……………あつ、今のカットでお願いします」

えっと、人生って常に生放送じゃないかと思うけれども少女の願
いに応えておく。というか、今の発言は無視しなければいけない気
がする。

「で、まあ、俺だと確信している理由については訊かないとして、
どうして、君が来たの?」

「どうしてというと?」

「ほら、君のお母さんを俺が助けたんだとしたらなんでお母さんのほうがこないのかなって思うのは普通だと思われませんか？」

「あのですね、お母さんは今、出産したてです。たしか弟と妹です。お母さんが冬前にちゃんと栄養をとっていたおかげです。で、だから人間化するととも体力を使うので、出産したてのお母さんの身体だと耐えられない可能性も……カッターで」

「……………まあ、いいや」

よくないけど。だって人間化、人間化って、今この子そう言ったぞ！

咳を一つついて、家に向けて歩き出す。今日はやけに冷えるな。

寒いと幻覚見えるっていうけど本当のようだ。

「ちょ、待ってください。なんでそんな納得したような顔していくんですか？」

「いや、俺って妄想力豊かなんだな、って思ったただけけど？」

「私は幻覚じゃありません」

「第三者がいないと分からないからさ。そして、今この周囲誰もいないし。ということは……幻覚って事で良いんじゃない？」

「『良いんじゃない？』って良くないですよ。そうしたら、私、御母さんに何て言ったら良いんですか？」

「大体、俺は人妻なんか助けてない！」

「御母さんは未亡人です！」

「そんな事言わんでもいいです」

「だって、御母さんは貴方に命を救ってもらったんですよ。弟と妹の分も含めれば三人分救ってます」

「だからどうやって？」

「そう、それはとある寒さも和らいだ日の事でした」

少女はすらすらと語り出した。

「冬籠りを終えたお母さんと私と弟と妹は地面からでようとしていました。けれども、不運なことに地面が硬くなってさらに穴も塞がれているのです。出産直後で体力のなくなったお母さんといまだ非

力な私と弟と妹では地面を突き破ることも出来ません。そうして私達家族が諦めかけた時でした」

そこで少女は間を置いた。冬籠りとか、地面とか、もう、突っ込みどころ満載で、相手の正体とかすぐわかるけれどもそこは無視。「貴方が現れたのは」

そこで、少女はこちらを向く。結局お母さんだけではなく自分も一緒に助けられてるんじゃない？ ていうか、ごめんなさい。思い出しました。

「貴方は私たちの危機を察知したかのように丁度私たちの上に立ちました。そして、手に持ったスコップでおもむろに地面を掘り進み私たちを救い出してくれましたよね。そして、その上さらに食料まで提供してくれました。本当に感謝しています」

「……その食料どうした？」

「私たちは割と草食なので肉はあまり食べないんです。だから、ある程度食べてから捨てました。すいません。折角食べやすいよう細かくしてくれたのに」

「……なるほど、それでか。」

「いや、別に謝らなくても良いよ」

「というわけで、貴方は命の恩人なんです。だから、恩返しさせていただきます」

「……恩返しはどうでもいいとして、取り敢えず、俺の家に上がって話そう。ここで地面に寝そべった君と話していると俺が警察に捕まりかねない」

そうしたら色々と本当に面倒な事になりそうだし、あと、少女の喋っている内容も少し後ろ暗い事なので、このままここで喋って欲しくない。

俺の言葉に、少女は多分にこりと笑った。

「ありがとございます」

それから約一週間。インフルエンザで学級閉鎖中の俺は、『ちう』という彼女の名前、彼女の種族と人間化について知っていた。彼女は炬燵をいたく気に入ったようで、一週間程入り浸っている。なんでも、寒いと身体が勝手に冬眠体勢に入ってしまうらしい。ただ、普通、彼女の種族の冬眠は本来眠りが浅いはずなんだけれども、ちうは割と深く寝る。どうにも野生の力が感じられないものだ。今日ちうは炬燵の上に顎を載せて午前中からだらつとテレビを見ていた……完全に引きこもりだと思うのは気のせいかな？俺はそんな彼女を横目に期末試験対策をしていたのだが、彼女はテレビに飽きたように炬燵に潜り俺の横から少し幼い顔を出す。

「で、そろそろ恩返しさせてもらえませんか？」

「だから、具体的に決めろって何回も言ってるだろ？」

ちうは右拳を口に当てて考えこむ。くりくりとした目で何かを探るように俺を見ってくる。

「んー、実はお母さんから『精一杯身体を使って奉仕していらつしやい』って言われたんですけど、お母さんが言っていた『奉仕』って何をすればいいのかわからなくて」

「……………多分、この家の家事を手伝って事だと思う。というか、炬燵から出てそう言った事をやりましょう。このままだと逆に俺の生活費を削っているだけになる」

まあ、電気代とか金の心配は全くないから本当は別にいいけれども。

彼女は少しなき眼になっているけれども、それは炬燵との決別についての涙だから別に罪悪感を感じる必要もない。

「……………じゃあ、内職します。毛皮は渡せませんが、手先はきつと器用だから大丈夫です」

「炬燵から出る気はないのかよ」

「そうしたら寒さで動けません」

「一応恒温動物だろ？」

「気合いの問題ですよ」

「気合いないのかよ。ていうかそんなこと言ってるで電源切るぞ？」
「うわあ、酷いですよ。…………ご主人様は酷いです」

そんな事をちうは半泣き目で、妙に色っぽい格好で言う。格好は色っぽいけど、全然色気を感じない。まあ、色気がないから俺も多分まだ理性を保ててるとは思っただけけれど。ていうか、待て。

「ご主人様”って何？」

「さっきのお母さんの台詞で思い出したんですけど、お母さんがそう言えば男の人はこう言えば喜ぶって言ってたから」

なんでお母さんそんな人間事情を知ってるんだらう？

「……人前では絶対に言わないで下さい。分かった？」

「じゃあ、なんて呼ばれたら喜ぶの？」

ものすつごくマニアックな感じで呼んでくれると結構喜ぶかもしれないけれども自粛。そんなえっちいことを少女に言わせるなんて変態まがいな事はしない。

「名前で呼んでくれ」

俺の事を名前で呼ぼうとして、少し照れている少女を見て、あの日の事を思い出す。バイトの後処理を山の中で行なうために地面に穴を掘るとそこには獣の親子がいた。食われるかと思い、荷物をその場に放置し、そのまま帰った。多分、獣のお母さんたちが処理してくれなかったら俺はこの場に入れなかったに違いない。少女の髪を梳く様に綺麗な黒髪に手をいれた。なんとなく、頭を撫でたくなつた。くすぐつたそうにちうは頬を紅らめる。

「やめてください」

「で、結局、恩返し、何にするか決まった？」

「……私の髪って触ってて気持ち良いですか？」

「……まあ一応」

「……じゃあ、その、私の髪を好きなだけ触っていいって事にします」

「ということは耳とかおでことかうっかり触っちゃいけないんだ」「いけないって事もないですけど」

「おでこ触っちゃったついでに眉毛とか触っちゃ駄目なんだ？」

「……じゃあ、いいです！ 私の体を好きなだけ触っていいって事にします！」

爆弾発言をした少女はその言葉の重要さをまるで分かっていない。互いの認識のギャップに少し笑えてきた。そんな俺を見てちうはぽかりと殴る。凄く微笑ましい光景だ。だけれども、思い出して、心の中だけで少し溜息。

……副業、殺し屋、やりづらくなるなあ……。

第一話、かみんぐないとぅおーかー（後書き）

えっと、どうも初めまして。楽しんでもらえたのなら光栄です。これから不定期に更新していく予定デス。できましたのならば、感想等をもらえれば嬉しい限りでございます。ではまた次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3392c/>

赤羊は夜空に歌う

2010年10月17日02時40分発行